

沖

10  
2015

創刊45周年記念コンクール発表

俳句雑誌[おき]



# 端の端

能村 研三

## 随筆集

梅雨冷や温みまだある硝子ノブ

こだはりの書肆の奥棚団扇風

フットワーク軽くて潜る茅の輪かな

はしつこく息継ぐ間合ひ祭笛

「沖」の創刊四十五周年を記念して私の随筆集をつくることになった。「沖」の「五百字随想」の欄は、創刊以来登四郎、翔の時代から当月作品十句の下段のスペースを使って、その時々のおいをショートエッセイに書き綴ったものである。先師登四郎は、この百五十回分を『鳩の手帖』に二冊にまとめた。これは季節ごとに感じたこと、旅をすればその印象、書物を読んだり、芝居を観たりして興った感動を書いたものである。登四郎は趣味も多才で、芝居や美術展の鑑賞など芸術全般に渡って造詣が深く、それぞれの文章には味があった。これ以前に『花鎮め』という随想集があり、さらには「雁渡し」という随筆が日本エッセイスト・クラブのベストエッセイに選ばれ、文藝春秋から出された『耳づくろ』というエッセイ集に収められている。俳句のみならず、文章力にも

日の粒を抱きしままに藻の咲けり

炎帝の熱気を殖やす棘なる木

端の端定位置にして端居かな

酢加減の勘冴えてをり胡瓜揉

片白草すべり言葉は戻らずに

秋意濃し磨滅御顔塩地蔵

たけていた登四郎に追いつくべく、私なりの思いを書き綴った。

私は平成十年一月から、「沖作品」の選を登四郎から引き継ぎ、その翌年から私も作品十句と下段に五百字随想を書くことになったので、十六年の百九十回分を収載することになった。当初はこの中から選んだものを載せようと思ったが、出版社とも検討し、全篇掲載することになった。私の全てをさらけ出すようで少し面映ゆい思いもある。

この欄を書くようになった頃から、役所の仕事で文化を担当するようになり、市内に在住する多くの芸術家や作家と交流する機会を与えられたことも、私には大きな肥やしとなった。

エッセイ集のタイトルは『飛鷹集』（ひおうしゅう）とさせていだいた。登四郎が『鳩の手帖』としたのも「鳩亭」の庵号からきたものなので、私は句集名に『鷹の木』『滑翔』などもあることから「飛鷹」という名前を思いついた。

# 蒼茫集



今年の色

菅谷たけし

己が葉を台座に泰山木ひらく  
星まつり願ひの言葉みな簡素  
萩むらに今年の色の顕ちにけり  
干梅やいつも何かに妣踏み  
真炎天勝者敗者の影分かつ  
馬になり牛になる茄子選びけり

夏蝶の渴き

辻美奈予

土器に触れ夏蝶の渴きをり  
夏草の濡れゐるごとくうら若し

はるか世の父へ新酒をここここ  
あきらめる明らかなる秋になる  
ピーマン累累ほむら色ひとつあり  
生理的食塩水や素風くる

塩壺の塩

林昭太郎

塩壺の塩のつめたき大暑かな  
拜啓と書けばぢぢと夜の蟬  
流れぬは川とは言はず終戦忌  
万緑やいま攻め焚きの登り窯  
涼しかり火より生れし火焰土器  
古新聞括り残暑をくくりけり

こころざし

楠原幹子

パリ祭

内山照久

やさしさのたとへば合歓の花あかり  
滴りの満を持したる形かな  
身の程の青梅ほどのころざし  
振花や好きと素直に言へばよき  
いささは次男に甘く冷し酒  
三歳の記憶の欠片蟬しぐれ

パリ祭や胸いつばいにアコーデイオン  
一日の労をいたはり日傘巻く  
シテの出のすり足涼し橋懸り  
子を叱る親の少なし日雷  
かなかなに引きとめられし夕日かな  
ヨット行くあやふきまでに身を挺し

夏帽子

細川洋子

暑くなる

大畑善昭

夏帽子の数だけ好奇心あらん  
気魂ひしひし夏寂びの円空仏  
飛驒夜涼「めでた」の後は親しめり  
鯉呼吸してゐるやうな熱帯夜  
逡巡のあと無き蟬の穴ありし  
狼籍の音を尽くせし花火かな

山鳩よ今日もいよいよ暑くなる  
羅や隣りて伽羅の香の人と  
立秋の夜風が家の中通る  
きれぎれの夜蟬でありきけふ鳴かず  
岐川のその岐川の鳥兜  
草々や露一粒にあをき宙

実行は力 酒本八重

実行は力雷神の一喝に  
かなかなや雨後の水嵩すぐ退きぬ  
もやもやとけぶりて蚊遣香親身  
いま更に良縁などと吊忍  
三伏や齡のなりの呆け癖  
戦後七十年廻転椅子の廻る秋

無農薬胡瓜

梅村すみを

存分に曲がつて無農薬胡瓜  
板さんの美男子なりし祭鱧  
空よりも青きプールや子らはしやく  
眠たげな眸の露座仏や土用あい  
甚平着てつくづく無理のきかぬ齡  
いのち惜しむごとと葡萄食む一粒づつ

筆 庄 安居正浩

うつむいてゐて向日葵でなくなりぬ  
とぼとぼとゆき炎帝の奴隸めく

筆庄の強きの集ふ登山口  
妖怪の世を垣間見し昼寢覚  
手花火の一本ごとに闇ふやす  
蟬穴の数をかぞへてゐる不安  
傾 ぐ 千田百里

八月の海や機影のくぢらめく  
蟻の塔傾ぐ地球儀の中は空  
紙魚の棲む古地図の生家あたりかな  
父母と兄相乗り茄子の馬傾ぐ  
星飛ぶやビー玉にある五彩波  
蟬の死に蟬しぐれてふ挽歌かな

鬼やんま 森岡正作

炎帝の戴冠式の日なるべし  
恋人へ振る夏帽を鷲掴み  
空蟬の直に奏づる風の韻  
東京へもう帰るなと鬼やんま  
鬼太鼓の背は荒海星飛べり  
相撲には一家言ある生身魂

白 壁 千 田 敬

白壁をしばらく点す空蟬は  
魂棚や席順ありし茶の間卓  
ゆくゆくは吾が身もたのむ茄子の馬  
登高の魂頂に残しおく  
冬瓜の味もて人を誘ひけり  
右は過去左は未来蟬しぐれ

夜 涼 宮内とし子

旅の荷の詰めればつまる朝ぐもり  
炎帝に槍の先向け槍ヶ岳  
炎天を戻りてはづす装身具  
美しき指先鮎の骨を抜く  
吊橋の一陣の風秋めける  
地球の美宇宙よりきく夜涼かな

日傘の影 甲州千草

日傘くるくる食事処の定まらず  
白壁の日傘の影の鋭きことよ

襜褕のごと上着を抱へゆく残暑  
反抗期めいて端居の夫の背  
人間は転ぶものなり葛嵐  
山笈とどめをりたる熟葡萄  
ゴスペル 上谷昌憲

いづこよりゴスペル毛虫降りてくる  
滴りや草臥れてゐるふくらはぎ  
躰糸解くごとく蟬鳴き出づる  
黙禱や一人ひとりの真炎天  
島裏に抱卵の海猫ひしめけり  
きりぎしに波立ち上る海猫の島  
潮どき 洲上千津

炎帝に帽子まぶかく恭順す  
潮どきは己のみ知る雲の峰  
かくあれと花咲き登る立葵  
広島忌夕地震はしり締めくくる  
拾ふ神ありて九十路終戦忌  
ひと亡くて恩寵のこる露の里

余音の幅

吉田政江

炎天を来て言行の整はず  
引き下がることで納まり兜虫  
大西瓜三等分とはややこしき  
梵鐘高山千光寺三句の余音の幅の涼しかり  
涼気漂ふ円空の木端書  
翠嵐の風をとこ込み摩尼車

紐一本

久染康子

遊び舟堰越ゆる度唄途切れ  
今年竹節しろ白と紛を噴けり  
篠の子採りけものやうに斜面這ふ  
日本の傷痕重き八月来  
盆帰省母亡き母の部屋に座し  
奔放な萩を宥むに紐一本

地平線

成宮紀代子

アウライン失ふ街や溽暑なる  
体温でサドルを冷ます炎暑かな

崩し字の円み涼しきおしながき  
ビル風にはたと色なき風過ぐる  
始発涼し座席は誰も端が好き  
大連に行きたし秋の地平線

生き証人

望月晴美

敗戦日生き証人の言重く  
夫がゐたことが不思議や孟蘭盆会  
一途とはかなしきものよ水中花  
目礼に目礼返し涼気過ぐ  
群衆に夕日さしくる花火前  
さりげなく散らす青紫蘇朝の膳

方寸の闇

松井志津子

敗戦日陽射しに音のあるごとし  
写経せり百畳といふ涼しさに  
闇押しして鶴舟の下る早瀬かな  
手花火に方寸の闇借り申す  
大腿筋鍛へてをると生身魂  
終末エンディングノート帳買ひてそのまま秋に入る



# 潮鳴集



ひんやり

内山花葉

熱帯夜街騒波のごと白む  
迅雷に利根の大地の起ち上がり  
灼け土を抱く敗退の球児らは  
精霊馬馳せ来よ封印酒をあげむ  
耳裏のひんやりとある厄日かな

梵 鐘 鈴木浩子

御嶽へ届けと梵鐘撞く晩夏  
日焼とは違ふ撫仏艶の笑み  
大暑より逃れ龍二尾天井へ  
摩尼車まはし風呼ぶ秋を呼ぶ  
語り部の民話聴き入る夜の秋

男の意気

清水佑実子

祭山車男の意気の組み上がる  
飛驒路へと青嶺屏風を辿りけり  
鐘一打響動もす袈裟の青嶺かな  
夾竹桃あの日もけふもヒロシマに  
丁重な暮しあれよと稲の花

蝶 番 富川明子

優曇華やいつより鳴れり蝶番  
鶏小屋に風入れに行く夏休  
五歳児の空かきまはす捕虫網  
猛暑日の百葉箱の白さかな  
浜風や子に耳裏の日焼け洩れ

林 昭太郎

夏 終 る

汝が耳にやはらかき骨雪もよひ  
待春やティッシュは函に伸び上がり  
コピー機に本押し付ける多喜二の忌  
啓蟄の土を湿らすほどの雨  
水飴の気泡うごかず花曇  
囀や今たけなはの炊飯器  
花冷の包丁にある裏おもて  
朧夜を水の袋のやうに猫  
亀鳴くやチェロより重きチェロケース  
行く春を言葉の遅き子とおりぬ



俎板をはしる熱湯けふ立夏  
一斉にひらくナプキン緑さす  
新緑や声よくとほる拡声器  
葉桜を揚げば堅きシャツの襟  
竹となる嬉しさに竹皮を脱ぐ  
聖五月ポプラは風を誘ふ木  
講堂に楽器の揃ふ青葉の夜  
くはだては単純がよし心太  
冷房の中や日の射すキーボード  
ヘアピンがプールの底に夏終る

石崎 和夫

弓 三 昧

日輪を臍下に納め弓始  
杉板の的弾けたり初射会  
残身の弓手に瞬の余寒かな  
巻藁に矢の震へをり春の雷  
海鳴りや耳たぶ大き涅槃仏  
矢返しの声かけ合ふや梅雨の月  
青時雨手刀切りて甲矢抜けり  
遠的の白く光るや雲の峰  
汗ばみて控への射手の瞑目す  
甲矢絞る比叡の嶺の滴れり



八射一中射会の後の生ビール  
荒神輿黒潮洗ふ御浜入り  
秋風や跪坐より弓を捧げ立つ  
串団子並べ雨月の射会かな  
切れ弦の矢道にとびぬ菊日和  
神垣の杜に的中音さやか  
冬鴟や弥陀の一枚起請文  
矢のやうに的場横切る颯かな  
月冴えて射礼稽古の的一つ  
天心に寒月蒼し百射射て

篠藤千佳子

うすらひ

雪降るや梯子掛かりしままの家  
雪を来て出汁の匂ひの勝手口  
おにぎりの味噌香ばしく春を待つ  
江ノ島の猫とたはむる春隣  
砂山をなでゆく風や春立ちぬ  
うすらひのこはれはじめのおとをきく  
度量とは枡をあふるる春の水  
桃咲いて髪美しく老いにけり  
三月へ転がるゲートボールかな  
多目的ホールにひとり春一番



食卓に人増えてゐる木の芽時  
自覚するまでの時間やヒヤシンス  
春灯に紐ついてゐる揺れてゐる  
遊園地めきて盥の磯巾着  
客層の散らばつてゐるチューリップ  
たんぽぽの絮毛吹くひと吹かぬひと  
朧夜の出雲へ向かふ列車かな  
玉子焼最初に食べて山笑ふ  
側面にひらがなの名やあたたかし  
ドーナツの箱入りを買ふ暮春かな

# 沖作品



## 能村研三選

短冊の墨はや乾く夜の秋

揺り椅子にちちの手擦れや夕端居

燃ゆるかに稜線染むる野分前

雷に裂かれし立木仁王像

高山の「めでためであ」の鱧の椀

天空へ神の道あり山開

秋近し稜線極む槍・穂高

白南風や男浪を砕く警備艇

孟蘭盆会飛驒の匠の和蠟燭

莫逆の友に献杯盆の月

屋顔や門扉の錆びる鉄工所

翡翠の跳ぶ間も人の老いゆける

省略をしすぎし地図の街炎暑

卒業と言うて職退く雲の峰

人類の地球は一つメロン切る

愛知

近藤 鉦子

静岡

鈴木 齊夫

神奈川

大矢 恒彦

千葉

竹内タカミ

市川市

本池美佐子

東京

山下ひろみ

夏の朝静もる湖は魁夷の藍  
玻璃一枚隔て炎暑の大櫛  
インターホン越しに伝はる暑さかな  
羽抜鶏一目散といふことも  
蟻の引く翅の白きが光りをり  
驚きの時空分け合ひ青蜥蜴  
本箱は丸ごと自分史額の花  
走り根のうねりあらはに五月雨  
万物のふつと息吐く夏の果  
鯉跳んで島影淡き日本海  
どくだみの十字や時にクルセダー  
甚平やうそも愛想も身につけて  
かはたれの空明け広ぐ睡蓮花  
水閃閃泉に生まる地の命  
鈍行の停まれば纏ふ油照



# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

燃ゆるかに稜線染むる野分前 近藤 鉦子

西の空が夕焼けで染まると、明日は良い天気になると言われている。ところが台風が近づいて来ると、様子が違う。台風から噴き出した水蒸気が上空に流れ込み、太陽の光を異常に散乱させて、いつもよりも空が濃い赤色になる。その上風により不純物が大気中から除去されることにより、夕焼けをより綺麗に見せてくれる。このように科学的に解析してしまつと余り面白くないが、古人などは天候の異変に伴う夕焼空は不気味だつたに違いない。山々の稜線をくつきりと際立たせ、沁み込むように染めた夕焼空の様相はさぞ美しかつたに違いない。

天空へ神の道あり山開 鈴木 齊夫

日本は、九割近くが山地であるが、昔から山に神々が宿り、

それを霊山や霊峰と呼び敬虔な祈りを捧げてきた。富士山や御嶽山がその代表的なものであり、豊かな自然の恵みへの感謝や噴火、洪水、干ばつ、暴風雨の抑止と安穩を願ひ、崇拜し続けてきたのである。山開きは、普通七月一日に、シーズン中の登山の安全を祈願して行われるものであるが、この山開きも昔から信仰的な意味を持っている。麓から頂上へ、そしてその道は天空へと続いていた。スケールの大きな句である。

卒業と言うて職退く雲の峰 大矢 恒彦

退職という言葉はやや寂しげで響きが悪い。その人にとって一時期全霊を傾けた仕事が終わるのである。しかし、それで終わりではなく、次の新しい世界が待っている。これをやや前向きに「卒業」と言い換えてみると気分が明るくなり、勇気も出てくる。新しい人生がこれから始まる。退職の後の長い人生が待っているのも、時代の変遷によるものなのだろう。

羽抜鶏一目散といふことも 竹内タカミ

羽抜鶏という大抵の鶏がみすばらしく見える。多くの鳥は夏から秋にかけて全身の羽毛が抜け替る。ももことたくさん羽毛をつけていた鶏たちはその歩き方にも余裕があったが、いざ羽根が抜けてしまうと、その動きも何かに追われるようで落ち着きがない。小屋を出てきても一目散に駆け寄る姿が可笑しかつた。(以下略)